

桜花蹴散らす嵐に注意

いろはつづり

春といえば桜の花見、日本人にとって最も馴染み深い花だ。今年のソメイヨシノは、驚いたことに3月21日に東京で全国トップを切って開花した。長崎や松山は3月30日、鹿児島は4月5日だった。寒気が流れ込んで、満開どころか開花を待たずに「花冷え」が続いて各地で開花が遅れた。水戸でもやっと3日に開花し、昨年より6日遅かったが、お陰で入学式に開花した桜がプレゼントされた。

桜は前年の夏に花芽をつけて休眠し、真冬の寒さで目覚める「休眠打破」を経て、つぼみを膨らま

古川 武彦 元気象庁予報課長

執筆者紹介



1940年生まれ。滋賀県出身、鹿嶋市在住、理学博士。61年に気象庁研修所高等部(現・気象大学校)卒業。予報課長、札幌管区気象台長など歴任。退官後の2003年に気象研究や啓発に取り組む活動の舞台「気象コンパス」を立ち上げた。

せ始める。開花時期はその後の日照時間に左右されるが、タイムリグは直近の天候に支配される。

「桜前線」は南国からスタートし、関東へ、東北へと北上し、5月初旬に北海道に達するが、今年こゝろは混沌こんとんとしてとても前線が描けない。近年の開花時期の乱れは、都市部におけるコンクリート化やエアコンの排熱に起因する「ヒートアイランド現象」の進行、さらに地球温暖化に伴う異常気象の頻発の影響を受けていると思われる。

関東の桜は散り急ぐ。百人一首に「久かたの ひかりのどけき 春の日に しづ心なく 花のちるらむ」(紀友則)の句があるが決して穏やかな日ばかりではない。春は北の寒気と南の暖気がぶつかり合って低気圧が急速に発達し、花を蹴散らす嵐や融雪雪崩も起きるので注意が必要だ。

気象庁は「週間天気予報」や「1か月予報」を定期的に更新しているが、これらの予報はすべてスパコンを用いた「数値予報モデル」で計算されており、予測精度は世界でも屈指を誇っている。